

「人生の達人」

りょうこ
寺中 龍子 さん (55)

昭和 39 年、4 人兄弟の次女として
彦根市で生まれ、育つ。地元の高
校を卒業後、事務職として島原高校
で勤務。平成 4 年、子どもをろう学
校へ通わせるため退職、同時に手話
を学び始める。平成 26 年から島原
手話サークルの代表となり、現在も
17 人の会員と一緒に月 3 回、聴覚障
害者の社会参加を目指す活動が続
けるなど、本市の社会福祉の向上に
尽力している。寺中町在住。



「令和元年」を指文字と手話で表
す練習をしている、寺中さんと
手話サークルの皆さん

普段は一番街アーケードの「が
んばスタンプ事務所」で、元氣
に働いている寺中さん



ありのままに 生きる選択

「健康しまばら福祉まつり」で手話の
ボランティア活動をする、寺中さん
と手話サークルの皆さん (右)

息子と手話で会話を交わしながら、
食事をする寺中さん (左)



子どもと共に歩む人生

生後 4 カ月の二人目の子どもが聴覚障
害だと分かった寺中さん。その後すぐ、
手話サークルへの入会を決めました。

仕事を辞め、子どもと一緒に毎日休む
ことなく、県立ろう学校幼稚園に通いま
した。当時の幼稚園は、手話を禁止して
いましたが、将来子どもと手話で話をし
たいという強い信念で、手話の勉強を続
けたそうです。

子どもと一緒に成長したいという思い
から小・中学は地元の学校に通わせ、高
校では再び、県立ろう学校へ通わせまし
た。

みんなが笑う場面で、笑えない子ども
に気付き、寺中さんが手話で会話をして
あげたそうです。その結果、みんなと同
じタイミングで笑う姿を見て、「手話を
してきて良かったなあ」と実感したそう
です。

高校卒業時、子どもから「お母さんが
手話ができて良かった、ありがとう」と
言われ、「自分がしてきたことは間違っ
ていなかった」と、嬉し涙が止まらなかつ
たそうです。

手話の普及を目指して

平成 2 年から手話サークルの活動を続
けている寺中さん。「手話のレベルを高
めたい、手話ができる人材を育てたい」
という強い思いがあるそうです。

しかしながら、手話通訳者の養成講座
が島原には無く、同様な講座を受講する
には、長崎市などに通うしかないのが現
状です。親の介護や家族の世話をしてい
ると、手話の勉強に費やす時間が無く、

手話が つなぐ 家族の絆

輝く島原人

THE SCENE Vol.19 島原に生きる

日々葛藤しているそうです。

寺中さんは「島原で、手話通訳者の養成講座を開催して欲しい。そして、街中どこにいても気軽に手話で会話できる、ろうあ者に優しいまちになってほしい」と、切に願っています。

ある時、子どもから「お母さん、手話が下手になったね」と、言われたそうです。「日本語でも英語でも、日常使っていないと下手になるし、話せなくもなります。手話は大切な言語の一つです。手話が必要とする人が、気軽に手話でコミュニケーションをとれる環境を作りたい。そのため、多くの人に手話に対する理解を深めて、もっと手話が普及する活動をしていきたいです」と、今後の目標を話してくれました。

子どもと家族に感謝

子育ても終わり、ひと段落した寺中さん。もちろん手話サークルは続けますが、手話以外にも誰かの、何かの役に立ちたいという強い思いがあるそうです。

幼いころ、積極的にいろいろな仕事を引き受けていた両親の影響からか、「これからは、独り暮らしの高齢者への声掛けや見守りなど、地域のために役立つボランティア活動をしてみたい」と、抱負を語ってくれました。

「障害のある子どもと支えてくれる家族がいてくれたことで手話を覚えることができ、生きがいとなるボランティア活動にも関わることができました。そんな子どもと家族にあらためて感謝したいです」と、今までの人生を振り返り、優しい笑顔で今の思いを話してくれました。